

## M-GTA研究会News Letter No. 69

**編集・発行：**M-GTA研究会事務局（立教大学社会学部木下研究室）

メーリングリストのアドレス：[grounded@ml.rikkyo.ac.jp](mailto:grounded@ml.rikkyo.ac.jp)

研究会のホームページ：<http://m-gta.jp/>

**世話人：**浅野正嗣、阿部正子、小倉啓子、木下康仁、倉田貞美、小嶋章吾、坂本智代枝、  
佐川佳南枝、竹下浩、丹野ひろみ、塚原節子、都丸けい子、林葉子、宮崎貴久子、  
三輪久美子、山崎浩司（五十音順）

---

### < 目次 >

第66回定例研究会報告	・・・ 1
【第1報告】（中間発表）	・・・ 2
【第2報告】（中間発表）	・・・ 10
【第3報告】（構想発表）	・・・ 22
【特別企画】	・・・ 28
◇近況報告	・・・ 28
◇次回定例会のお知らせ	・・・ 31
◇編集後記	・・・ 31

---

### ◇第66回定例研究会の報告

【日時】2014年1月11日（土）

【場所】立教大学

【出席者】64名

阿曾 亮子（日本医科大学）・阿部 正子（長野県看護大学）・李 秀眞（弘前大学）・石岡 未和（京都大学）・磯崎 京子（早稲田大学）・板垣 咲紀（千葉大学）・伊藤 美千代（東京医療保健大学）・今井 尚義（大真大学）・岩崎 美香（明治大学）・牛窪 隆太（早稲田大学）・氏原 恵子（聖隷クリストファー大学）・大石 ゆかり（埼玉）・大澤 千恵子（淑徳大学）・小倉 啓子（ヤマザキ学園大学）・尾山 未由季（国立看護大学）・梶原 葉月（立教大学）・

唐田 順子（西武文理大学）・川添 敏弘（ヤマザキ学園大学）・木下 康仁（立教大学）・  
木村 幸代（横浜市立大学）・草野 淳子（大分県立看護科学大学）・小嶋 章吾（国際医療福  
祉大学）・酒井 香奈（千葉大学）・坂本 智代枝（大正大学）・佐川 佳南枝（熊本保健科学  
大学）・佐藤 直子（日本チャリティ協会）・雫 公子（立教大学）・清水 史恵（京都大学）・  
白柳 聡美（浜松医科大学）・鈴木 泰子（信州大学）・鈴木 康美（東邦大学医療センター佐  
倉病院）・鈴木 祐子（国際医療福祉大学）・鈴木 優子（埼玉医科大学）・高橋 由美子（個  
人）・田代 ひとみ（東京外国語大学）・田中 満由美（山口大学）・田辺 有理子（横浜市立  
大学）・玉城 清子（沖縄県立看護大学）・田村 朋子（立教大学）・田山 友子（東京医科大  
学看護専門学校）・丹野 克子（山形県立保健医療大学）・丹野 ひろみ（桜美林大学）・塚原  
節子（常葉大学）・辻村 真由子（千葉大学）・寺崎 伸一（ジャパンケア川崎日進）・中野 真  
理子（東京慈恵会医科大学）・中村 聡美（NTT）・根本 愛子（一橋大学）・野村 信威（明治  
学院大学）・林 裕栄（埼玉県立大学）・平松 万由子（三重大学）・古尾谷 侑奈（国立看護  
大学）・前原 和明（栃木障害者職業センター）・真鳥 理美（青山学院大学）・三浦 恵美（東  
北大学）・緑川 綾（ひもろぎ心のクリニック）・峯岸 佳代（埼玉県総合リハビリテーショ  
ンセンター）・宮城島 恭子（浜松医科大学）・矢島 正榮（群馬パース大学）・山崎 浩司（信  
州大学）・山田 紋子（北里大学）・横山 豊治（新潟医療福祉大学）・吉田 由美（目白大学）・  
渡邊 恵里（放送大学）

## 【第1 報告】

牛窪隆太（早稲田大学日本語教育研究センター）

### 「新人日本語教師の教育機関への参加における葛藤構造」

#### 1. 問題意識

日本語教育における教師研究は、第二言語習得論、教育学の影響を強く受け行なわれてきた。1980 年代に、オーディオリンガルメソッドからコミュニケーションアプローチへという教授法の転換が起こる中で、教師養成モデルも、特定の教授法を身につけそれを再生する教師から、自身の教授活動を振り返ることによって自己成長を遂げていくという、「自己研修型」教師を目指す必要性が指摘されるようになった（岡崎・岡崎；1997，横溝；1998）。それとともに日本語教育に導入されたのが、アクションリサーチ（横溝；2000）である。アクションリサーチとは、教師が自身の教育活動で発見した問いを解決することによって授業を改善して行くための具体的方法であり、日本語教師が自己成長を遂げていくための具体的モデルとなった。しかし一方で、日本語教育に導入される段階において、アクションリサーチにもともと備わっていたはずである「変革」の視点が排除され、単なる教授技

術向上のための方法論に過ぎなくなっているという指摘（三代他，2011）もなされた。つまり，教師が自身の教授活動を振り返るとしても，それが与えられた枠組みの中での改善を志向しているのであれば，それは教授法の獲得を目指した従来の教師養成モデルとなんら変わりはないのである。飯野（2012）は，従来の教師の成長モデルの限界を指摘した上で，日本語教師の成長を教師のアイデンティティ交渉に置きなおし，教育機関を移動しながら，日本語教育についての立場（考え方）を交渉するという新たな日本語教師のあり方を示している。様々な経歴を持つ教師がともに教育に携わる日本語教育の現場において，教師がお互いの考え方を交渉することによって，流動的に教育実践を組み換えていくというあり方は，今後，日本語教育のあり方が多様化することを考えても必要となる視座である。

それぞれの教師がお互いの考え方を交渉するためには，自身の日本語教育についての考え方を認識し，それらが交渉される場が準備されている必要がある。しかし，日本語教師がどのような環境の中で教師としての経験を積んでいるのかについては，ほとんど明らかにされていないという現状がある。例えば，大河原（2006）は，10年にわたる自身のコーディネーションの経験を述べる文脈で，教育機関において教師は，学習者にとってだけでなく，コースコーディネーターにとっていい授業をすることが求められると記している。また，松田（2005）は，27名の現職日本語教育に対して行なったアンケート調査において，ほとんどの教師が学習者のニーズに応えることを日本語教育の目的とし，ベテラン教師であっても，自身の教師としての役割について明確な回答が得られなかったとしている。これらの指摘が示唆することは，日本語教師は，自身の日本語教育についての考え方を持ち得ない環境に置かれていることであり，その中で経験を積むことが求められているのではないかということである。

本研究では，日本語教師をめぐる環境に注目する。日本語教師をめぐる環境をとらえその問題点を明らかにするためには，まずは，教師がどのような環境の中で，日本語教師としてのスキルや考え方を身につけているのかを明らかにする必要があるだろう。そのために本研究では，新たに教育機関に参加した新人日本語教師がどのような構造の中で問題を感じ，それをどのように克服していくのかをプロセスとしてとらえることを目指す。新人教師が感じる問題の構造を明らかにすることから，日本語教師の成長をめぐって，日本語教育関係者が考えるべき課題を提起したい。

## 2. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究が M-GTA に適した研究であると考えるのは，以下の 3 点からである。

M-GTA は，研究対象がプロセス的特性を持っているヒューマン・サービス領域に適しているとされる。本研究の対象もまた，学習者を対象としたヒューマン・サービス領域に関わる新人日本語教師である。そして，本研究は，新人日本語教師の職業参加のプロセス的側面に注目し，新人教師の学びや葛藤のあり方を他の教師や学習者との相互作用に位置づけ

ようとするものである。プロセスと相互作用の二点に注目することから目的に適うものであると考えた。次に、本研究は、自らも日本語教師である筆者が、新人教師の語りを対象として行なうものである。つまり、ここでいう新人教師にとっての「よりよいあり方」は、教師として筆者自身の価値判断や経験を免れない。M-GTA では、「研究する人間」の視点が重視され、分析ワークシートを使用することで選択的判断の妥当性が分析過程においても、常に検討可能な状態におかれる。そのことから、筆者自身の教師としての主観性を保持しつつ、恣意的解釈を軽減することによって、妥当な結果を導くことができると考えた。さらに、本研究は、新人教師が抱える問題とその克服を構造的に把握すること、そしてそこから、日本語教師の成長をめぐる課題を考察するものである。M-GTA は、実践現場での応用が明確に意図された研究方法であるとされる。

以上、プロセス性、研究する人間の視点、現場での応用性の3点から、M-GTA は、本研究の目的に適うものであるといえる。

### 3. 研究テーマ

筆者は、2011年から現在まで、新人日本語教師（経験年数5年目程度まで）を対象としたインタビュー調査を行ってきた。インタビューは、日本語教師になろうと思ったきっかけから今までの教育機関での経験を中心に話してもらう半構造化インタビューである。新人教師が成長するためには、教育についての「明確なビジョン」持つことが重要であり（秋田、2007）、特に、日本語教育においては、言語教育観が重要となる（細川、2012）とされる。インタビューを開始した当初のテーマは、教育機関において新人教師がどのように言語教育観を実現して行くかを教育機関への参加をとらえることによって検討することであった。インタビュー調査を進めるうちに、経験を積みながら日本語教師としての自信を獲得し、創造的に授業を作り出している教師がいる一方で、思い描いていたものと現実が異なることへの違和感や、教師としての自信のなさを訴える教師が少なくないことが見えてきた。これらの教師は、他の教師と相談しながら授業を作り上げていくのではなく、自分ひとりで授業を抱えているようであった。このことから、問題を感じている新人教師に焦点を当て、問題を感じ克服するプロセスのあり方を明らかにすることによって、日本語教師の成長をめぐる課題を明らかにできると考えた。

### 4. 分析テーマへの絞込み

インタビュー調査の協力者は19名であった。すべての新人教師は、日本語教師の仕事に何らかの難しさを感じており、楽な仕事であると話した教師は一人もいなかった。その中で、本研究の分析対象者としたのは、授業について問題を感じていると話した教師15名である。うち、2名以外の教師は非常勤の教師であった。新人教師たちは、繰り返し授業を担当することによって教師としての自信を得ていたが、他の教師の授業を見る機会や同じコースを担当している教師と話し合う機会はなく、養成時代に身につけた典型的なやり方を

繰り返す中で、自身の授業に疑問を持つようになっていた。一方で、3年以上の経験を持つ教師からは、自由にやっていいと言われていたが、やっとその意味がわかったという声が複数聞かれた。このことから、新たに日本語教育業界に参入した新人教師が求められる日本語教師としてのあり方の中で、自分なりのやり方を模索するようになるまでを一つのプロセスとしてとらえ、分析テーマを「新人日本語教師が求められる教師としてのあり方の中で自分なりの授業を模索するプロセス」とした。

## 5. インタビューガイド

インタビューは、2 時間程度の半構造化インタビューを個別に行なった。「日本語教師になろうと思ったきっかけから今までの経験を教育機関での経験を中心に話してください」と問いかけ、時間軸に沿って経験を話してもらいながら、適宜質問を行なった。その中で、以下の4点については、すべての教師に質問した。それは、1) 日本語教師の仕事は以前のイメージと同じか、2) どのように授業のやり方を覚えたか、3) 他の教師と授業について話をどのようにしているか、4) 授業で困ったときはどうしているか、である。複数の教育機関で教授経験を持つ教師にはそれぞれ機関別の経験を話してもらった。

## 6. データの収集法と範囲

都内の複数の日本語教育機関に依頼し調査協力者を募った。また、日本語教師養成プログラムに携わる知り合いにメーリングリストなどでの情報の拡散を依頼し、さらに、自身が働いていた教育機関の知り合いの教師にも声をかけた。教師のライフコース研究では、6 年目程度までに安定期に入るとされることから、本研究では、安定期に入る前の5 年目程度までの教師を新人教師とすることとした。日本語教師は非常勤で仕事を始めることが多く、教育機関を移動する場合も多いため、特定の教育機関での経験年数ではなく、あくまでも教師歴でカウントした。

本研究で問題を感じている教師とみなしたのは、インタビューにおいて、日本語授業について「どうしたらいいかわからない」「自分が教師をやっているのかわからない」など、仕事を続ける上での困難を語った教師15 名である。複数の教育機関での教授経験を持っている教師のうち、特定の教育機関での経験についてのみ条件に合う場合は、その部分のみを分析対象データに含めた。

## 7. 分析焦点者の設定

授業に対して問題を感じている新人日本語教師

## 8. 分析ワークシート例（※当日回収資料）

### ●「自由に見学できない」

日本語教師として授業のやり方をどのように学んでいるのかについて生成された概念に

「自由に見学ができない」がある。これらの概念は、多くのバリエーションを得ることができたものであった。教師たちは、研修時に数回、他の教師の授業を見ることを除き、ほとんど他の教師の授業を見る機会がなく、教案指導を受け、時折、授業見学に入るベテラン教師からフィードバックを受けることによって、技術を身につけることが求められていた（反対例はなく、新人教師が自由に授業を見られるケースはなかった）。バリエーションからは、日本語教育機関において、教師がお互いに授業を見合うということが避けられる傾向にあり、新人教師もまた、他の教師の授業を見るという事ができない雰囲気があると感じていることを見て取ることができる。教務主任がどんどん見てよいと言っている場合でも、他のベテラン教師がそれを嫌がる場合や、教案を見たいといっても、見せるためのものではないと見せてもらえないなどの場合があった。また、先輩教師に最近の新人教師は簡単に授業見学をさせてほしいというが、自分たちのころは自分たちで試行錯誤していたといわれたというものもあった。これらから考えられることは、新人教師は既に教育機関や先輩教師の間で共有されているストックがある場合にも、自分ひとりの力で授業を組み立てなければならないということである。これらの例から、求められるあり方として、一人でやることに関連する概念を考えた。

なぜ新人教師は実際の授業を見たいと思うのかを考えてみると、教案指導、授業見学によるフィードバックを中心に研修が行なわれることで、実際の授業を動きがわからず、よりよいやり方がわからないからであると考えられた。日本語教育ではチームティーチングで授業を担当するが、他のベテラン教師の授業が見られないのであれば、他の授業の様子がわからないまま、新人教師は自分のコマの中で試行錯誤するしかないことになるのではないかと考えた。このことから、データを読み直したところ、ムービーがあればいい、実際にどのような授業をしているのかわからない、教師用指導書を見てもわからないなどの発言が見られた（「動きがわからない」）。また、教育機関でそれほど教授方法について厳しい制限がされておらず、むしろ自由にやっているとされている場合でも、教師たちは、教科書の通りにやらなければならないと考えていた。このことから、授業を見ることができない教師たちにとって、教科書通りに教科書の文型や語彙を使って話すことが、拠りどころになっているのではないかと考えた。

## 9. カテゴリー生成

カテゴリーは、チームを組んでいる他の教師についての概念群と、それ以外のプロセスに関わる概念群という大きく2つのまとまりを中心に、以下のように生成した。

チームを組んでいる他の教師についての概念群については、サブカテゴリーまでの段階で、新人教師が感じる「非常勤＝フリーランス」というあり方、そしてそれと相互影響関係にある「分業システム」、そしてそれらから、新人教師が下手なことはせずに他の教師に合わせようとする「無難にやる」へという流れが見えた。これは、週に数コマからコースに入り、しかもベテランの中で一人前として授業を担当しなければならないために新人教

師が感じる気後れ感から、お互いがフリーランスであり、それぞれが自分の分担をこなしていけばコースが終わるという環境の中で、関係を持つ必要のないまま、無難にやることを志向するようになるというものである。この解釈の背景にあるのが、先に述べた、仮に自由にやっていいといわれている場合でも、新人教師は、やり方のバリエーションがわからないことによって、教科書や典型的なやり方を自身の指針にするということである。これらのことから、他の教師との関係性は、新人教師が自由にやることを促進するものにはなっていないと考えられる。

チームの教師との関係性についてまとめた段階で、残りの概念については、概念生成の段階で見た 3 つの流れを中心に考えていった。それは、新人教師に求められている教師としてのあり方、繰り返しの授業の中で新人教師が感じるようになる一段落感、そして 3 年以上の教師たちの語りから生成された、自分なりの新しいやり方を模索するというものである。これらのかたまりごとに関係性を確認し、カテゴリー化していった。

まず、サブカテゴリーとして作成してあった[教科書＝指針]、[自分ひとりでやる]を【求められる教師性】とした。[ゼロから手探りで]は、〈自由に見学できない〉から派生させて作成した〈自分で何とかする〉と〈動きがわからない〉の二つの概念をまとめたものである。これら二つの概念は、「自分一人でやる」という意味を持つものではあったが、他の教師の授業が見られないことによって、「自力で一人前になることが求められること」、「授業の具体的な動きがわからないという不安感」を持つというものである。教師たちは、〈動きがわからない〉で「最初は物まねでいいと思う」「雰囲気を感じるみたいな感じ」と発言しており、自分ひとりでやるという意味だけではなく、参照できるものが手元に少ない状態の中、手探りで進んでいくことが求められているというものであった。このことから、これらを[ゼロから手探りで]とし、[自分一人でやる]と区別した。

次に、サブカテゴリーとして作成した[初級は大丈夫]、[考える時間のなさ]から【再生期】というカテゴリーを生成した。これらの概念は、自分一人で教科書を指針としながら、初級の授業を繰り返すことによって、教師たちが感じるようになる安定感と、ある程度授業を任されるようになることによって授業の準備に追われながら、ゆっくり考える時間もなく、教科書を指針とした授業をぐるぐると再生するという、対立にある二つのサブカテゴリーを含んでいる。これらは、典型的なやり方ができるようになり、コマを任され忙しくなればなるほど、何も考えずに授業をこなすようになるという関係にある。ここから派生する概念に、〈このままでいいのか〉があった。この段階で新人教師たちは、一人前の日本語教師として扱われるようになっている（例えば、授業見学に他の教師が入ることとはなくなる）が、「なんか、やり方として本当にいいのかなっていう戸惑い」を感じたり、「他の先生の授業が見られない分、あるべき授業の仕方、よくわかんないですけど」など不安を感じたりするようになっていた。

この概念の反対例として生成されたのが、〈こういうものだという受け入れ〉である。「疑問を抱くってことはなかったですね。それが日本語教育のやり方なんだっていうのに、本

当に入ってしまったという感じですね」,「特に、理想とかもなく、あ、こういう風な仕事なんだって」など、考えられないことによって、忙しく自分の授業を繰り返すという状況を受け入れるというものであった。

3年以上の経験を持つ5名の教師の語りからは、教師たちが、自身の授業における学生の反応を軸にそのような状況を乗り越えていることを示す概念が生成された。これらをまとめ、【創造期】と名づけた。これは、それまでの指針を「そうじゃなくてもいい」という気づきによって捉え直し、自分なりの授業のやり方を考えるようになるという方向性を示すものである。

「教案のあり方、本当うちの学校は教案がすべてってところがあるので、そんなじゃなくていいじゃんっていうのがあった」と、求められていることから自分の考える授業へと変えていったり、求められるのとは異なるやり方や、教材を修正して授業をしている先輩教師と出会うことで、「あのままじゃ使いにくいからってご自分でかなりアレンジしているようなので、変えても全然問題ないんだなっていう」と、自分のプランに合わせて教材などを変えていくというものであった。

#### 10. 結果図（※当日回収資料）

#### 11. ストーリーライン（※当日回収資料）

#### 13. SV、発表当日を振り返って

・SVでは、なぜこの研究テーマか、この研究結果を現場の何に活かしたいのか、それはなぜか、プロセスの始点と終点はどこかなど、研究の根本から様々な問いかけをいただき、自分自身の「何となく」を徹底的に言語化することからデータへの向き合い方まで、多くのアドバイスをいただいた。解釈をオープンにすることの意味など、本で読んで何となく理解したつもりでいたが、実際の分析においてどういうことなのかを考えることで、より理解が進んだと思う。最終的には分析テーマを「新人日本語教師が求められる教師としてのあり方の中で自分なりの授業を模索するプロセス」とし、結果図も3回書き直した。

・発表当日、フロアから二つの問題関心が混在しているのではないかというご指摘をいただいた。それは、新人教師がおかれた環境を言いたいのか、新人教師の成長プロセスを言いたいのかというものである。また、これはOJTの初期の動きなのではないかというご指摘もいただいた。確かに、環境面とプロセス面の両方に焦点が当たっている議論になっていると気がついた。

・そこで、今回の分析では、環境面に焦点を当てることにし、現在、データ範囲を調節した上で、再び概念間の関係を見直しているところである。密度の濃いSVを受け、当日フロアからもフィードバックを得ることで、自分の考えが届く部分、届かない部分に気づくことができたのは貴重な経験だった。



今回の分析では、より範囲を広げプロセスに焦点をあてて、再度まとめたいと考えている。アドバイスを下さった研究会の先生方に感謝を申し上げたい。

## 【文献リスト】

### ・M-GTA 関連

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』，弘文堂

木下康仁（2005）『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』，弘文堂

木下康仁（2007）『ライブ講義 M-GTA』，弘文堂

佐川佳南枝（2003）「統合失調症患者の薬に対する主体性獲得に関する研究 第二報—グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて」，『作業療法』22 巻 1 号，69-78

根本愛子（2011）「カタルにおける日本語学習動機に関する一考察—LTI 日本語講座修了者へのインタビュー調査から—」，『一橋大学国際教育センター紀要』2，85-96

### ・本文中に引用したもの

秋田喜代美（2007）「教師の生涯発達と授業づくり」，『改訂版 授業研究と談話分析』，216-218

飯野令子（2012）「日本語教師の成長としてのアイデンティティ交渉—日本語教育コミュニティとの関係性から」，『リテラシーズ』11，1-10

大河原尚（2006）「他者の経験を知ることの意味：多様な確信（ビリーフ）を持つ教師と日本語コースのあり方に関する考察から」，『別科日本語教育：大東文化大学別科論集』8，1-9

岡崎敏雄・岡崎眸（1997）『日本語教育の実習：理論と実践』，アルク

細川英雄（2012）『「ことばの市民」になる 言語文化教育学の思想と実践』，ココ出版

横溝紳一郎（1998）「ティーチング・ポートフォリオ：自己研修型教師の育成を目指して」『JALT 日本語教育論集』第 3 号 15-29

横溝紳一郎（2000）『日本語教師のためのアクションリサーチ』，凡人社

松田真希子（2005）「現職日本語教師のビリーフに関する質的研究」，『長岡技術科学大学 言語人文科学論集』19，215-240

三代純平，古屋憲章，古賀和恵，寅丸真澄，長嶺倫子，武一美，市嶋典子（2011）「日本語教育実践としてのアクションリサーチ—教育実践共同体の構築へ向けて—」，『2011 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』

## 【SVコメント】

阿部正子 （長野県看護大学）

今回、自分の研究領域と異なるテーマの SV をお引き受けすることになったため、事前に

発表者の研究動機や背景についてお伺いしました。ご自身の日本語教師の経験から研究関心が導かれていることを理解したときに、この研究結果を誰にどう使ってほしいのかを問う必要があると感じました。それは M-GTA が研究結果の実践的応用を重視するからです。研究結果の活用について具体的にイメージするとき、常に人でイメージすることが大事で、この研究の結果は誰にどう使ってほしいのかを考え、その人たちに具体的な活用の仕方が出せているかが結果のオリジナリティに関わってきます。研究の意義を具体的に明記することが、結果の落としどころにつながっていくので、私自身いつもこの点については指導の際も自分の分析の際にも常に意識しています。

事前の打ち合わせでもう一つ確認させていただいたのは、概念間の関係性をどのように検討されたのかという点でした。概念を生成したあとに、複数の概念をなんとなく同じような意味内容でグルーピングしたり、静的な分類をしてしまうことがあります。それは分析過程で概念同士の関係性を検討せずに概念をいくつも生成してしまうことから生じます。初学者がよく陥りがちな点で、その点をもう一度検討し直してもらいました。短期間でご苦労されたと思いますが、当日の発表では日本語教師の方を含めていろんな方に結果図について、経験的によく理解できるところや新たな解釈の視点を提示して頂くなど、有意義な意見交換が出来ていたと思います。

最後に SV を担当した者としては、もう少し分析テーマを練る過程を支援できればよかったと反省しています。分析テーマを考えるときにプロセスの始点と終点を意識することが大切ですし、研究対象が有している現象としての特性をおさえた上で、最終的に明らかにしていくのはどのような“うごき”なのかを考えることが重要だと、木下先生の著書にもあります。その方向性を示すのが分析テーマなのですが、ここは本当に難しいところで、分析テーマへの絞り込みについてはまず私自身、今手がけているデータ分析の中で手応えを得て、成長を実感したいと思います。

## 【第2報告】

岩崎美香（明治大学大学院情報コミュニケーション研究科博士後期課程）

### 「日本人の臨死体験のプロセス」

#### 1. 研究の背景と目的

超常的、神秘的要素を帯びるなど、通常の観点から説明しにくい体験は、「変則的体験 (anomalous experience)」と総称されている。(変則的 (anomalous) とは、通常でない、例外的であることを意味している。) このような体験については、遡れば心理学の古典であるジェイムズの『宗教的体験の諸相』[ジェイムズ [1901-1902] 1920=1969-1970]に取り上げられているが、ジェイムズ以降、こうした体験は心理学のメインストリームから無視

されたり、軽視されたりする傾向が長く続いた。近年、変則的体験は人間の体験の全体性を構成する重要な一部であると捉えて、そうした体験を改めて検討していこうという動きが生じている[Candeña et al. 2000]。

本研究のテーマである臨死体験 (near-death experience) とは、一般にも比較的よく知られている変則的体験のひとつで、典型的には死に近づいた人や何らかの強い危機状態にある人に起こる、超越的で神秘的な要素を帯びた体験である。本研究の目的は、日本人の臨死体験のプロセスを体験者自身の体験内容に沿いながら明らかにしていくことである。

臨死体験は、病気や事故などで突発的に生命の危機に瀕した人たちから多く報告されてきた体験であるため、死に隣接する体験として関心を集めてきた。欧米では 1970 年代から研究が開始され、瀕死状態に陥った人に 30～40%に発生している体験であること [Ring 1980=1981、Sebom 1982=2005]、体験内容には文化的・個人的背景を超えた共通性があること [Moody 1977=1989、Ring ibid、Sebom ibid] が確認されている。また、結論は出ていないが、臨死体験現象の起きる原因や機序について活発に議論が交わされてきた (注 1)。

日本では臨死体験は、死にかけた人が親族に会う、三途の川や花畑を見るといった体験として以前から一般に知られていた。1980 年代半ばに、Moody の『かいまみた死後の世界』に刺激を受けたとする松谷みよ子は、日本各地に暮らす市井の人たちの「あの世の話」の体験談を数多く集めて編纂している [松谷 1986]2003]。

1990 年代に入ると、立花隆が NHK とドキュメンタリー番組「臨死体験」を制作。そこでは、臨死体験の発生メカニズムとしての脳内現象説と実体験説の検証が焦点となった [立花 1994]2000a、[1994]2000 b]。同じく 90 年代には、宗教学者のカール・ベッカーは、臨死体験が日本人を含む東洋人の宗教文化や死生観に大きな影響を与えてきたと指摘。臨死体験者の経験を私たちのよりよい生き方や死生観を形成する手がかりとして積極的に活用することを推奨している [ベッカー 1992]。また、医師の山村尚子は高齢者医療の現場では死への幅広い知識が必要であるとして、大学病院の患者を対象に臨死体験の調査を行った。その結果、昏睡状態に陥った患者の 4 割近くが臨死体験をしていること、患者個人の背景的要因と無関係に臨死体験は起きていることなど、アメリカでの研究結果と一致するような事実が明らかにされた [山村 1998]。

1990 年代には、このように日本人を対象とした臨死体験研究は盛り上がりを見せたが、それ以後、事例に基づく研究はなされていない。また、臨死体験後には、臨死体験者には心理面、身体面、感覚面でさまざまな変化があることが指摘されているものの [立花 ibid、ベッカー ibid、山村 ibid]、臨死体験中の体験内容と併せて、その後に生じた変化の中で体験者がどのように日常を生きていくのかといったプロセスに注目した研究はなされていない。本研究では、突発的な危機状態の中で「臨死体験」をした人が、その後、その体験をどのように位置づけ、また体験後に生じた変化とともにどのように生きていくのかを考えていきたい。

## 2. 分析テーマ

突発的な危機状態の中で、日常とは異なる様相が展開する「臨死体験」をした人が、その後、その体験をどのように日常の中に位置づけ、また生じた心理面、身体面、感覚面での変化を抱えながら、どのように日常の中で生きていくのかというプロセスが分析テーマである。

日本人の臨死体験の先行研究では、臨死体験でどのような体験が展開されたかについての記述は多くみられるものの、臨死体験後にどのような生活を送っていくかについてはあまり触れられていないため、臨死体験後のことに特に着目していきたい。

## 3. 現象特性

危機状態の中で非日常的な体験をして、日常に戻った人たちが、非日常の体験の影響を被りつつ、そこから新たな日常の中での生き方を見出していく現象。

## 4. M - GTA に適した研究であるか

臨死体験は、まず突発的な危機状態の中で日常から遠ざかり、そして非日常的な体験をして、また日常に戻ってくるという展開のパターンが見られる。このことから、プロセス的特性を有している。また、日常に戻った後に、体験の影響を受けながら、どのように日常生活を送っていくかという点までを研究の範囲に含めるため、社会的相互作用が生じている場面が含まれる。それゆえ、M - GTA に適した研究である。

## 5. 分析焦点者の設定

臨死体験（注2）をしたことのある国内に在住する日本人を分析焦点者とした。

## 6. データの収集

データ収集は、2008年3月から2013年5月の間に実施した。知人の紹介などを介して、男性7名、女性10名の合計17名の臨死体験者<sup>1</sup>に実際にインタビューすることができた。この内1名は、臨死体験を二度しているため、調査対象となったのは17名だが、臨死体験の事例は18例となっている（表1（回収資料））。あらかじめ、臨死体験の内容、その後の変化、本人の生活背景についての質問項目（下記参照）を用意し、それに基づいて半構造化されたインタビュー調査を実施した。面接の日時、場所、時間はあらかじめ対象者と連絡を取り合い、相談の上で決定した。対象者に録音許可が得られた場合はICレコーダーに内容を録音し、後で逐語録化した。録音の許可が得られなかった場合や録音機の不調などで録音ができなかった場合は、インタビューメモに基づいて、記憶した会話の内容を後で書き起こした。

<質問項目の例>

○その体験が起こったのはいつ頃ですか。複数回ある場合はそれぞれ時期を教えてください。

○どのような状況で起こりましたか。病気やけがの程度、受けていた治療など詳しい状況について教えてください。

○どのような内容の体験をしましたか。体の感じ、気分、見たこと、聴こえたことについて教えてください。もし、絵に描ける場合は、用意した画用紙に絵を描いてみてください。

○臨死体験後のご自身の変化についての質問です。

次のような点で、自分自身で変化したと感じた、もしくは周囲の人から変化したと指摘を受けたことはありますか。変化があれば詳しくそのことについて教えてください。

- ・ 死や死後の世界に対するイメージや考え方
- ・ 日常生活での関心や態度
- ・ 人生の意味や目的
- ・ 周囲の人に対する考え方や態度、人間関係
- ・ 宗教的・スピリチュアルな面について考え方
- ・ 身体
- ・ 能力や技能

## 7. 倫理的配慮

調査開始前に、調査対象者に対して、文書と口頭で調査の趣旨をはじめ、調査に協力するかどうかは自由意志であり途中であっても拒否できること、インタビューの内容は研究目的にのみ使用すること、対象者個人が特定されないように発表の仕方に注意を払うことや、インタビュー・データや個人情報の管理に努めることなどを十分説明した。また、インタビュー時に了承があれば録音したい旨も伝えた。その上で、調査対象者から文書と口頭で調査に協力への同意を得た。

## 8. 概念生成の実際

修士論文のためのデータ作成時（2009年10月）に、それまでに行った13事例の臨死体験者のインタビュー調査の内容を逐語録化して、概念を作成した。その時は80余りの概念が抽出され、過剰な概念抽出に陥ってしまったという反省があった。その後、5事例のインタビューデータが新たに追加された後に、あらためてコーディングをやり直した。①どういう状況で臨死体験に陥ったか、②どのような体験内容だったのか、③その後に起きた変化やそれをめぐる対応といった部分に主にアンダーラインを引いて読み込んだ。修士論文作成時は、概念名、定義、バリエーションの完成に力を入れ、理論メモはほとんど書かなかったが、今回のコーディングでは理論メモ欄に対極例や類似例、解釈時に思考したことを書き込むようにした<参考資料1（回収資料）>。現在のところ、概念は49個となっている。

## 9. カテゴリー生成の実際

以下、概念を<>で、概念のひとつ上のカテゴリーを【】、そのまた上位のカテゴリーを《》で表示する。

まず、概念<日常とは異なる世界への予兆>と<日常意識からの遠ざかり>の近接関係に注目。これを日常から離れた状態に近づく状態として、カテゴリー【後退する日常】で括った。臨死体験の中の出来事として、概念<差し込む光><暗闇の訪れ><体を離れての俯瞰><空間を浮遊><通路としての場へ><見知らぬ場所への移動><広がる自然の光景><何ら化の存在との出会い><異なる世界での生活>が抽出されたが、これらをカテゴリー【出来事の展開】として括った。また、<駆け巡る回想><苦痛のない感覚><思わず向こうへ行きたくなる気持ち><時空の超越感><リアルな体感><冷暖の感覚><聴こえてきた音楽><漂う香り>を【伴う感覚と知覚】というカテゴリーに入れた。【出来事の展開】と【伴う感覚と知覚】は臨死体験の前半で相互に関連しながら展開している様子がうかがわれる。日常世界から遠ざかったのちに、異なる世界の中で展開されているように見られるこの近接するカテゴリーを《異なる世界への参入》という上位カテゴリーで括った。

臨死体験の中の後半で発生する事態には、<いつの間にか終わった場面><引き戻し><招きの拒否><招きの受け入れ><待ちぼうけ><戻ろうとする意志><立ち塞がる障害物>が見出されたが、これらはその世界から離脱するきっかけになる場面転換を表しており、【留まれなくなる事態の発生】として括った。一方、【留まれなくなる事態の発生】は、臨死体験から意識が戻る状態である<我に返る意識>、そして、臨死体験後にも光景などが残存する出来事<残り続ける異なる世界>に近接しており、臨死体験の後半部分の出来事である。非日常の世界から戻ってくるまで部分を《異なる世界からの離脱》として包括した。

臨死体験後の<残り続ける鮮明な感覚>と<出来事の確認>との近接性に注目し、【体験の確信】として包括した。こうした【体験の確信】がある一方、<体験を受け止めきれない心><理解されない思い>という体験をもてあます概念が見られ、これらを【位置づけへの戸惑い】として括った。また、臨死体験後には、様々な変化が見られた。これらのうち、臨死体験での体験やそこからの洞察によっての変化である<世界観・人生観の転換><死後イメージの明確化>が近接しており、【体験のインパクトによる変化】で括った。臨死体験後との直接の因果関係は本人にはわからないが、なぜか気づくと生じていた<身体・気分の変化><超常的感覚の高まり>を【気づくと生じていた変異】として包括した。<生の有限性への自覚><他者への感謝と報恩><健康や安全の重視><使命の探求>は、臨死体験そのものというよりも生命の危機状態がもたらした変化として語られるので、これらを【生命の危機がもたらした変化】としてまとめた。変化の一方、対極概念として変化はなかったとする<変化のなかったその後>がある。これと、<体験を受け止めきれない

い心>の対極概念である<体験をごく自然に受容>を臨死体験後に変化や抵抗などを感じなかった類似概念と考え、【変わらずに送る日常生活】で括った。臨死体験による変化に基づく反応としては、<迷いや葛藤への揺れ戻り>があるが、これと類似する概念として、<超感覚の高まり>によって引き起こされる<社会生活の中での違和感や齟齬>がある。この2つの概念を【日常でのコンフリクト】としてまとめた。<体験の共有化>、<鋭敏な感覚の緩和>、臨死体験に自分なりの意味付けを与えて受容する<体験への意味の付与>は、コンフリクトを調和させ日常生活を安定させる類似概念として考えられ、【受容と調和による安定】として包括した。<体験のインパクトの伝達><霊的ケア役割の引き受け><職業上のモチベーションへの反映>は臨死体験という非日常を社会へ持ち込み還元していく類似概念として【社会への発信】カテゴリーで括った。また、《異なる世界からの離脱》の後に展開されるこれらの概念やカテゴリーをまとめて《日常への復帰》の上位カテゴリーで括った。

## 10. 結果図（回収資料）

### 11. ストーリーライン

明らかにしていきしたのは、臨死体験者を中心に据えた日本人の臨死体験のプロセスである。結果図を見てみると、コアとなるカテゴリーは、【後退する日常】《異なった世界への参入》 《異なった世界からの離脱》 《日常への復帰》である。これらは、日常から非日常への世界へと入っていき、再び日常に戻っていく臨死体験の時系列のプロセスである。

概念と下位のカテゴリーを交えて、ストーリーラインを見ていこう。臨死体験は、何らかの危機状態に起因する<日常意識からの遠ざかり>からはじまる。後で振り返ると、直前に異なる現実が具体的な形として示されたり、臨死体験の中で展開されたものと同じ体験をしていたという<日常と異なる世界への予兆>が思い起こされることもある。【後退する日常】に代わって、<差し込む光><暗闇の訪れ><体を離れての俯瞰><空間を浮遊><通路としての場へ><見知らぬ場所への移動><広がる自然の光景><何らかの存在との出会い><異なる世界での生活>など、現実離れした【出来事の展開】がある。<駆け巡る回想><苦痛のない感覚><思わず向こうへ行きたくなる気持ち><時空の超越感><リアルな体感><冷暖の感覚><聴こえてきた音楽><漂う香り>などの【伴う感覚・知覚】が【出来事の展開】と連動しながら、あたかも【異なった世界に参入】したような状態に入る。異なった世界では、途中で、<引き戻し><招きの拒否><戻ろうとする意志><立ち塞がる障害物>などが持ち上がったたり、<招きの受け入れ><待ちぼうけ>で場面が転換したり、あるいは<いつの間にか終わった場面>によって【留まれなくなる事態が発生】する。そして、気づくと日常の自分に戻っていて、<我に返る意識>という状態を迎える。意識が戻った後も、直前にいた異なる世界の光景を目にしたり、そこで出会った人と再会したり、自分を癒す存在がやってきたりと、<残り続ける異なる世界>

を体験することもある。

日常生活に戻った後、異なる世界での鮮明で確かな手ごたえが記憶に残り続けたり、または自分が見たものの証拠を現実世界の中に発見したりして、【体験への確信】を深める。＜体験をごく自然に受容＞、＜変化のなかったその後＞とともに【変わらずに送る日常生活】を続ける場合もある。また、臨死体験後の変化が、【生命の危機がもたらした変化】だけの場合、その後、【変わらずに送る日常生活】という方向に落ち着くこともある。一方、＜体験を受け止めきれない心＞や他者から＜理解されない思い＞を抱えて【体験の位置づけへの戸惑い】を示すことも見られる。ところで、臨死体験後には、臨死体験での体験内容に基づく＜世界観・人生観の転換＞＜死後イメージの明確化＞といった【体験のインパクトによる変化】や、「身体・気分の差異」「超常的感覚の高まり」という臨死体験後に【気づくと生じていた変異】、そして【生命の危機がもたらした変化】である＜生の有限性の自覚＞＜健康や安全の重視＞＜他者への感謝と報恩＞＜使命の探求＞が見られる。これらの変化は日常生活の中でポジティブに働き得る反面、＜世界観、人生観の転換＞などの【体験のインパクトによる変化】がその後に揺らいだり、【生命の危機状態がもたらした変化】である＜使命の探求＞が迷いの中に陥ったりなど、＜迷いや葛藤への揺れ戻り＞が生じたり、【気づくと生じていた変異】の＜超常的感覚の高まり＞などによって＜社会生活での困難や齟齬＞が引き起こされるといった【日常でのコンフリクト】が発生する方向に影響する場合もある。こうしたコンフリクトは、同じ感覚や体験を持つ人々と出会って＜体験の共有化＞をすること、徐々に自然に、もしくは努力して＜鋭敏な感覚の緩和＞をすること、そして臨死体験に自分なりの意味付けを与えて受容する＜体験への意味の付与＞といった【受容と調和による安定】が働くことによって徐々に鎮静化されていく。また、【位置づけへの戸惑い】も、＜体験への意味の付与＞を含む【受容と調和による安定】へ向かうことによって受容されていく。【体験のインパクトによる変化】は、【日常でのコンフリクト】を経ずに、直接【社会への発信】行われる場合もあるが、《日常生活への復帰》内の影響関係を見てみると、臨死体験という非日常での体験の【位置づけへの戸惑い】や【日常でのコンフリクト】が【受容による調和と安定】を経るプロセスを通して、【社会への発信】を行い、臨死体験という非日常的な体験を徐々に社会へ還元していく様相が浮かび上がる。

＜注＞

(注1) 臨死体験は、心理的な現象であるという「心理学的仮説」、脳の生理学的な働きによる現象であるという「神経生理学的仮説」、肉体から分離した意識が死後の領域を実際に体験したものであるとする「実体験仮説」の3つの仮説が検討されてきた[Greyson 2000]。

(注2) 臨死体験は、研究初期には、限りなく死に近づいていたことが必要条件とされた。しかし、その後、臨床的には死に近づいたとは言えないようなケースでも、臨死体験に特徴的な体験が出現していることが明らかにされた[Owen et al. 1990]。こうした状況を鑑み、Greyson は、臨死体験を次のように定義する。「臨死体験とは、超越的で神秘的な要素を帯びた深い心理的な出来事であり、典型的には死に近づいた人、もしくは生理的または情緒的に強い危機状態にある人に起こる。それらの要素は、個人の自我を超えたという感



覚、神もしくは高次元の原理と一体になったという体験、といった言い表しにくい内容を含んでいる」[Greyson ibid] (訳文筆者)。本研究では、この臨死体験の定義に基づいて、調査対象となる人を探して、インタビューした。本研究で扱う臨死体験は、必ずしも心停止などを伴っているわけではない。

#### <引用文献>

- James, W. (1920) *The varieties of religious experience : A study in human nature*. Longmans, Green, and Co. (Original work published(1901-1902).) (ジェイムズ, W. 増田啓三郎(訳) (1969)/ (1970) . 『宗教的体験の諸相』 上/下巻 (岩波文庫) 岩波書店)
- Candeña, E., Lynn, S. J., & Krippner, S. (2000). *Intoroduction: Anomalous experience in pespective*. Candeña, E., Lynn, S. J., & Krippner, S. C. (Ed). *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence*. Washington, D. C. : Amer Psychological Assn, 3-21.
- Ring, K. (1980). *Life at death : A scientific investigation of the near-death experience*. Coward, McCann & Geoghegan. (リング, K. 中村定(訳) (1981). 『いまわのきわに見る死の世界』 講談社)
- Sabom, B. M. (1982). *Recollections of Death : A medical investigation*. Harpercollins. (セイボム, M. B. 笠原敏雄(訳) (2005). (『「あの世」からの帰還—臨死体験の医学的研究—』 日本教文社)
- Moody, R. A. (1975). *Life after life : the investigation of a phenomenon—suvival of bodily death*. Mockingbird Book. (ムーディ, R. A. 中山善之(訳) (1989). 『かいまみた死後の世界』 評論社)
- Greyson, B. (2000). *Near-Death Experience*. Candeña, E., Lynn, S. J., & Krippner, S. C. (Ed). *Varieties of anomalous experience: Examining the scientific evidence*. Washington, D. C. : Amer Psychological Assn, 315-352.
- 松谷みよ子 (1986) . 『現代民話考〔5〕 死の知らせ・あの世へ行った話』 立風書房 (2003、ちくま文庫)
- 立花隆 (1994). 『臨死体験』 文藝春秋 ((2000a)/ (2000b). 『臨死体験』 上/下巻 文春文庫)
- ベッカー, カール (1992) . 『死の体験 —臨死現象の探求』 法蔵館
- 山村尚子 (1998). 「臨死体験 —終末医療における意義の検討—」 日本老年医学会雑誌、35 (2)、103-115.
- Owen, J. E., Cook, E. W., & Steavenson, I. (1990). *Feature of “near-death experience” in relation to whether or not patients were near death*. *Lancet*, 336, 1175-1177.

#### <参考文献>

- 木下康仁 (2003). 『グランデッド・セオリー・アプローチの実践—質的研究への誘い』 弘文堂

- ・ 木下康仁 (2007). ライブ講義：M-GTA：実践的質的研究法：修正版グランデッド・セオリー・アプローチのすべて』 弘文堂
- ・ 西條剛央 (2007). 『ライブ講義 質的研究とは何か (SCQRM ベーシック編)』 新曜社
- ・ 西條剛央 (2008). 『ライブ講義 質的研究とは何か (SCQRM 応用編)』 新曜社

#### ◆主な質問やコメント

##### 【SV からの質問やコメント】

質問：「日本人の臨死体験のプロセス」というテーマを選んだ動機について、研究全体をどのようにもっていきたいかと直結する部分であるのでお聞かせください。

回答：以前、沖縄のシャーマニズムを研究していたが、非日常的な体験を重ね、苦悩や葛藤を経てシャーマンになった人々の聞き取りをしたことがあり、その人たちの体験を大変興味深く感じた。臨死体験は、ごく普通の人々が体験するものであるが、非日常的な体験をどのように日常の中に位置づけて調和させていくのかについて関心があった。

質問：誰にこの研究を伝えたいですか。

回答：臨死体験はごく普通の人々が誰でもする可能性のある体験であるが、その体験の特異性や体験後に生じる変化ゆえに、その後葛藤したり、苦悩したりすることもある。この研究は、臨死体験という非日常的な体験をした人に向けて、体験を捉え直し、その後の日常生活を生きる一助になればと考えている。

質問：M - GTA に適した研究アプローチとして採用するのは、現場への還元やそこからのフィードバックをもらうという現場との密接な循環的な関わりが必須である。その点で、このテーマ設定がM - GTA に適しているかを考えなくてはならない。他に適した研究方法はないかということを検討しましたか。

回答：これまで事例研究の方法で「臨死体験後の死生観の変化」をテーマにした論文を書いたが、M - GTA を使うことによって、臨死体験全体のプロセスを捉えたいと考えている。

コメント：全体のプロセスを捉えて理論化を目指すのであれば、M - GTA は適している。しかし、現場へどの程度還元する志向性があるのかがはっきりしないので、そこを考えていただきたい。

質問：データの収集について、インタビュー対象者をどのようにリクルートしましたか。

回答：指導教官の先生のところの臨死体験をしたという人の声が寄せられていたことがあって、まずそういう方に対してインタビューを行った。また、知人に「自分は臨死体験のことを研究している」と話すと、その知り合いの人で臨死体験をした人を紹介してくれることが思いがけず多かった。それから、たまたま知人の家に行った時に出産時の臨死体験についての話題が出たというように、偶然に本人の語りを聞く場において対象者を見つけることもあった。

質問：分析テーマについて、読み上げないで空で言ってみてください。

回答：非日常的な体験である、臨死体験をした人が、その後、その体験をどのように日常の中で位置づけ、活かしていくのかというプロセス。

コメント：分析テーマは、何も見ないで空でスラスラと言えるくらい洗練されたものでなくてはならないが、レジュメを読むとどこが始点なのかわかりにくい。

コメント：分析テーマの絞り込みが曖昧だったために、始点が先ほど口頭で言い直してくれた「臨死体験後のプロセス」というよりも、その前の「臨死体験のプロセス」から始まっていて、すごく“大きな結果”になってしまった。M-GTA を使った研究は基本的には現場で活用してほしいということがある。だから、現場の人が印象的に覚えていられるくらいのコンパクトでインパクトのある理論をつくることが求められる。そういう意味では、（この結果図では）理論としての力を発揮できなくなっている。分析テーマを絞り込んだり、あるいは分析テーマを2つに分けるなどして、まとめ方を工夫していく必要がある。

コメント：結果図の《日常への復帰》の部分では、臨死体験をした当事者がどのようにその体験を意味づけていくか、それをどのように他人に語っていくかというプロセスをもう少し細かく見た方がよい。カテゴリー【位置づけへの戸惑い】から、急に【受容と調和による安定】へと移行するのは不自然だと感じる。この2つのカテゴリーの間に、何があるのかを検討すべきである。

#### 【フロアからの質問やコメント】

質問：臨死体験の定義、それから臨死体験と夢との違いについて教えてください。

回答：臨死体験に最初からきっちりとした定義があったわけではない。瀕死状態にあった人が回復した後にその時のことを語った体験に共通性があることが注目されたことによって「臨死体験」という枠組みが認知されるようになった。研究では「臨死体験」の具体的な内容や特性は、Moody の 15 要素や Greyson による臨死体験尺度を参照している。ところで、みなさんは「おやっ？」と思われるかもしれないが、（注2）にも書いたように、現在の定義では、臨床的な死に限りなく近づいたことを臨死体験の要件とはしていない。臨死体験研究の進展の中で、必ずしも死に近づいたとは言えないような体験の中でも同様な体験内容や特性が見られることがわかってきたからである。現在、臨死体験は、何らかの危機状態の時に生じる神秘的・非日常的な要素を伴う体験として定義づけられている。

夢との違いについては、インタビューした臨死体験者たちの多くから、「夢とは異なるリアルな体験だった」という言葉が聞かれる。

コメント：研究テーマが「日本人の臨死体験のプロセス」となっているので、臨死体験自体のプロセスなのかと思ったら、分析テーマは「臨死体験後のプロセス」ということだった。研究テーマは、臨死体験後のことを大きく扱うことを明示するようなタイトルにした方がよいと思う。

コメント：結果図の前半の臨死体験の部分は納得できるが、後半の臨死体験後のことは、

体験に対する意味付けの部分なので個人差があるように思う。臨死体験者というカテゴリーの人たちがこのプロセスをだいたい辿るということは言えないと思う。というのは、＜社会生活での困難や齟齬＞のワークシートを見ると、バリエーションが3つしかなく、しかもその内の2つは同一人物のものである。これをモデルとして出すのは危険かなと思う。分析テーマを2つの分ける、あるいはM-GTAでやる部分と事例研究でやる部分を分けるなどして、この辺をもう一度再考された方がよい。

コメント：研究にソーシャル・アクションがあるとよいということが指摘されていたが、臨死体験をした人は、ワークシートの事例での語りに見られるように、そういう体験をしたがゆえに社会との擦り合わせにおいて何らかの困難を抱えている人たちだと思う。【社会への発信】というところではなく、その人たちがどのように社会に溶け込んでいけるのかというところに視点を絞り、どのような支援が必要なのかというところに持っていくと、社会福祉的になってしまうかもしれないが、(ソーシャル・アクションとしての研究が)見えやすいのではないかなと思う。

コメント（木下先生）：臨死体験は個人的に大変興味のあるテーマだが、この分析だともやもやとした感じが残る。今回は臨死体験そのもののプロセスははずしたということだが、この部分のリアリティが絡んでこないと、臨死体験とこの結果がなかなかつながってこない。臨死体験のリアリティを出すためには、分析テーマの設定が重要である。

コメント（木下先生）：対象者の表を見ると、インタビューをした時と実際に臨死体験をした時の年齢との間が大きく開いている人がほとんどである。そのことから、臨死体験は時間を越えて人に語られるということの方に意味があるのではないかと考えたりもする。臨死体験をした人が、人から訊かれた時だけ語るのか、それとも自分から誰かに体験を語る場面があるのかというデータがあるとよいのではないかなと思う。

#### ◆報告を終えて

臨死体験をテーマに研究を始めてから、M-GTAの分析方法に関心を持って、書籍を参考にしながら手さぐりでコーディングを行ってきた。現在の指導教官とも、M-GTAについて共に勉強しつつ、取り組んでいるという状況である。この分析でよいのかと迷うことが多く、研究として前進しているのかも見えにくかったため、一度、M-GTA研究会で発表してみようと今回の研究発表に臨んだ。毎回研究会では、「研究がどんな段階にあってもよいので、発表者を募集しています」とアナウンスがある。その謳い文句に違わず、未熟な段階にいる私でさえも今回発表することによって得たものは大きかった。発表の準備をする中で自分の研究の中で曖昧にしていたことや迷いなどが明確になり、またSVをはじめたくさんの方々の有益なコメントをいただくことができたからだ。

自分で分析している時はどうしてもコーディングの際の細かな点などに目が向きがちだったが、SVやフロアからのコメントでは、大きな視点からのご指摘をいただけたのが非常によかった。分析テーマの絞り込みが不十分であること、また始点と終点の範囲が広すぎ

るのでコンパクトでインパクトのある理論化に到達していないことなど、今後改善して  
べき大きな点が見えた。

SV から現場への還元性ということを問われた時には、はっとさせられた。私はスノー  
ボールサンプリングによって広く日本人の臨死体験者を調査している。そして、特に「現場」  
というものを持っていない。その点では、学校や病院や会社組織などのわかりやすい還元  
対象があるわけではない。ただ、自分の研究は臨死体験など非日常的な体験をした人に必  
ず貢献できるはずだと思ってきた。だが、具体的にどの程度どのようにどんな経路を通じ  
て還元していくのか、その点を考える必要があると痛感させられた。

1時間という時間は思いのほか短く、まだまだ細かな点についてもいろいろお伺いした  
かったが、あっという間に時間になってしまった。自己管理の悪さから、SV に発表レジュ  
メを提出するのが発表前日になってしまい、ご指導をいただく機会が研究会当日のみにな  
ってしまったのは悔やまれる。

研究会終了後の懇親会でも、SV や周囲の方々にいろいろと親身なアドバイスをいただい  
たことがとてもありがたかった。また、「臨死体験」という畑違いであろう分野に、思いの  
外多くの方から関心を寄せていただき、いろいろとお話をするのができたことも、予  
想外のうれしい体験だった。

SV の山崎先生をはじめ、質問、コメント、感想をいただいた研究会の先生方や参加者の  
皆様に、この場を借りて感謝したい。そして、今回の研究会で得たことを糧に、また新た  
な気持ちで研究に向かい合いたいと考えている。

## 【SVコメント】

山崎浩司（信州大学）

岩崎さんは、日本人の臨死体験のプロセスを明らかにすべく、M-GTA による研究を試みて  
いる。スノーボール・サンプリングにより臨死体験の体験者にアクセスし、インタビュー  
で収集したデータをもとに概念化とカテゴリー化による理論生成を行なった。

最初にレジュメを拝読したとき、すぐに気になった点が3つあった。1つ目は分析テーマ  
が大きすぎるのではないかということ。2つ目は結果図が複雑すぎる。そして3つ目は  
ストーリーラインが長すぎることである。お気づきかと思うが、これら3つは相互に関連  
している。分析テーマは、分析焦点者やデータ範囲の方法論的限定と並んで、分析の幅や  
方向性を定めるものであり、適切に設定されていないと、分析が拡散的になりすぎて結果  
としてのまとまりがつかなくなったり、非常に膨大で複雑な結果になったり、あるいは逆  
にあまりに限定的で、適度な抽象的説明力を持たない結果になったりしかねない。今回の  
岩崎さんの中間的な分析結果は、拡散的で複雑になってしまっている。

M-GTA では、結果が拡散的で複雑になってしまっていないかどうか、判断するわかりやす

い目安がある。まず、ストーリーラインが A4 用紙 1 枚に収まるかどうか、である。（『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践』を再読して確認してください。）私たちは、A4 用紙で 2 枚 3 枚と続く長い文章を、記憶にとどめておくのは難しい。結果としての理論を作った分析者自身でさえそうならば、第 3 者として結果を読む人（場合によっては、必ずしもそのテーマの専門家ではなく、研究者でもない人）にとってはなおさらだろう。つまり、結果を読む人（M-GTA では基本的に現場でその結果を応用する可能性のある人）が、その結果を覚えていられるようなコンパクトさが結果（図およびストーリーライン）にあるかどうかを想像してみる、ということも、結果の適切さを判断する有効な目安となる。

岩崎さんのご研究では、分析テーマが「突発的な危機状態の中で、日常とは異なる様相が展開する「臨死体験」をした人が、その後、その体験をどのように日常の中に位置づけ、また生じた心理面、身体面、感覚面での変化を抱えながら、どのように日常の中で生きていくのかというプロセス」を明らかにすることとある。しかし、結果図とストーリーラインを見ると、「その後」以前の臨死体験の中身についても、概念化・カテゴリー化を試みている。私の認識が間違っているかもしれないが、臨死体験それ自体についてはそれなりに先行研究の蓄積があるように思うので、あらためて今回の研究で知見として提示する意義はあるのだろうか……。もしこの部分についても結果を出していくことに意義があるということならば、結果（理論）を 2 つに分ける（2 つの論文ないし章に分ける）ことを、検討されるとよいのではないだろうか。

もう 1 つ、これは岩崎さんの分析に限ったことではなく、これまでも何度も指摘させていただいたことだが、概念やカテゴリーを読むと、「何が」起きたかはわかるのだが、それが「なぜ」「どのように」起きたかがわからない。「何が」も大切だが、それが「なぜ」「どのように」起きたかについて結果を読む人が何らかのヒントを得られなければ、M-GTA が目指す「人間行動の説明と予測を可能にする理論」を生成できたことにはならないだろう。

最後に、研究テーマとしては大変興味深く、こうしたテーマが M-GTA で分析され、結果としての理論が生み出されることは、これまでなかなかなかったと思うので、岩崎さんのご研究の完成が非常に楽しみです。最終成果をぜひまたお聞かせください。

### 【第 3 報告】

平松万由子（三重大学医学部看護学科）

#### 「認知症グループホームにおける高齢者終末期ケア実践に関連する要因の検討」

##### 1. M-GTA に適した研究であるかどうか

本研究は、終末期ケアという、プロセス的特性を有する内容を扱うこと、またケア実践者とケアを提供される対象として的高齢者と家族、ケア実践に関わる協働者らの社会的相

相互作用を扱う内容であることから M-GTA で分析を進めたいと考えた。

## 2. 研究背景

高齢者にとって死は人生の完結として必ず訪れるものであり、老年期にある人々がどのような最期を迎えるのかということは、本人および家族にとっても重要な課題である。2005 年の介護保険制度改正においては、新たなサービス体制として介護老人福祉施設等の看取り加算、2009 年度には介護老人保健施設、認知症グループホーム（以下 GH）での看取り介護加算が新設されるなど、様々な場で高齢者の終末期ケアを強化する制度的な取り組みが進められている。これは、これまで療養の場、あるいは生活の場として位置づけられていた施設や事業所に対しての終末期ケア提供に対する期待の表れであると捉える事が出来る。

その中の一つ、GH は、介護保険制度施行当初、「認知症対応型共同生活介護」と定義され（以下同義で GH とする）、居宅サービスの一つとして位置づけられた。その後、2005 年の改正介護保険法第 8 条 14 項において地域密着型サービスの一つとなり、要介護状態となっても日常生活圏内で生活を継続できるよう新たに構築されたサービスの一翼を担うものであり<sup>1)</sup>、第 8 条 18 項では、「要介護者であって認知症であるものについて、その共同生活を営むべき住居において、入浴、排泄、食事等の介護その他の日常生活上の世話及び機能訓練を行うことをいう」と定義されている。

GH は、少人数の利用者と顔なじみのスタッフによって、安定的な人間関係のもとで共同生活を送ることで認知症になっても落ち着いた生活を営むことを支援するためのものであり厚労省の介護給付費実態調査月報<sup>2)</sup>によると、2013 年 10 月現在、全国で 12,124 ヲ所の事業所がある。

介護保険制度設立後さらに高齢化が進む中、GH においても入居者の高齢化・重度化に伴い求められる役割が徐々に変化してきた。それを受けて、2002 年には「初期から終末期に至るまでの地域に密着した望ましい痴呆性高齢者ケアのあり方に関する調査研究」として GH の終末期ケアの取り組みに関する意識や可能性についての実態調査が行われた<sup>3)</sup>。

また 2006 年以降、GH における終末期ケアに関連する報告書<sup>5)6)</sup>が示されており、その中で入居者家族の意識をみると<sup>6)</sup>、身体状態が悪化したときに希望する介護の場所は現在の GH が 68.1%、終末期を想定した介護の場所については 63.9%が GH と回答しており、その背景として内出は<sup>7)</sup>、なじんだ環境に囲まれた安心感、そのひとに寄り添いながらの継続的かつ豊かさのあるケアへの大きな期待と支持の現われであると述べている。さらに認知症高齢者数の将来推計などに基づいて厚労省により策定された「認知症施策推進 5 か年計画（オレンジプラン）」の基となる「今後の認知症施策の方向性について」<sup>8)</sup>によると、GH 入所者の重度化や看取りの対応を強化する観点から、「医療連携体制加算」や「看取り介護加算」として評価しておりこの評価を継続して実施する、と報告されており、今後の認知症施策においても重要な位置付けにあると言える。

しかし、2007 年の GH の実態調査<sup>9)</sup>によると、職員の平均在職期間は 1～2 年未満が約 3

割と入れ替わりが少ないとは言えない。また、GH の就職時に介護経験を持たない正規職員は 31.6%であり、一度も終末期ケアを経験していない介護スタッフが多いことも推測され、ケアの質の担保が重要な課題であるといえる。さらに、GH の特徴として組織の規模が小さく、介護老人福祉施設などに比べ管理職の終末期ケアに対する考え方は、事業所のケア方針に反映されやすく、管理職の終末期ケアへの意向がケアスタッフに対しても直接的に影響を及ぼすことが推測される<sup>10)</sup>。

また、GH においては看護職の配置が義務付けられておらず、勤務職種は介護職員 79.9%に対して看護職 4.6%と少ない現状である。そのため、法的には医療連携加算の制定などの連携促進の為の方策は講じられてはいるが、「認知症グループホームにおける重度化対応と医療連携に関する調査研究報告書」<sup>11)</sup>によると、医療連携体制制度においても、医療機関や訪問看護等との連携の難しさに対する意見が報告されるなど、終末期ケアを支える職種間連携にも課題がある。

一方で、2010 年に報告された「認知症グループホームの実態調査事業報告書」<sup>12)</sup>によると、「GH 内での看取り者」があると回答した事業所は 14.7%であったが、重度化対応・ターミナルケア等に関する運営方針として 39.4%が「希望に応じて積極的に取り組んでいく姿勢がある」と回答しており、今後高齢者が人生の終焉を過ごす場としての役割を積極的に担っていく姿勢が伺える。さらに厚労省の「介護サービス情報公表システム」によると、2013 年 9 月時点での GH 登録事業所数 10,808 に対して看取り介護加算を対象とする、すなわち終末期ケアの実施意思があり、実施していると考えられる事業所は 3,407、約 3 割となっており、終末期ケアに実際取り組む事業所は増加しつつある。

このように、GH では多くの課題を持ちつつも、高齢者が人生の終焉を生きる場所として、病院・施設・在宅ではない生活の場としての高齢者終末期ケア提供の可能性が期待されている。

先行研究として、GH における終末期ケアに関連した研究は散在するが、今だ、終末期ケア実践が約 3 割という現状の中、何が GH での認知症高齢者の終末期ケア実践を可能にし、さらに促進につながるのか、その詳細なプロセスを明らかにした研究は見当たらない。

高齢者にとっての死の意味を考えた時、これまで自分が慣れ親しんだなじみの環境、人々と共に生きる、人生の終焉の時間は大切なものであり、それを支えるケアサービスの充実が重要な課題である。

### 3. 分析テーマへの絞り込み

本研究では、高齢者が人生の終焉を生きる場の 1 つとして今後重要な役割を担っていくことが期待される GH での終末期ケアに焦点をあて、GH での終末期ケア実践を可能にする要因を明らかにしたいと考えた。その要因に関わる重要な 1 側面として、GH における終末期ケア実践に大きな影響を及ぼすと考えられる、管理的な立場にありケアを実践しているスタッフの、終末期ケアに対する思いと、GH における終末期ケア実践のプロセスを明らかに



したいと考えた。

#### 1) 分析テーマ

「管理的な立場にあるケアスタッフの GH における認知症高齢者の終末期ケアに対する思いとケア実践のプロセス」

※「管理的な立場にある」とは、「各職種リーダー以上の管理的役割を担い、ケア実践の場での決定権を持つ。ただし、職種は問わない。」と定義した。

#### 2) 現象特性

終末期ケア実施経験のある事業所において管理的立場にあるケアスタッフの、生活の場で人生の終末期を生き、終焉を迎える認知症高齢者に対する思いとそこから引き起こされるケア行動のプロセス。

#### 4. インタビューガイド

事業所の体制、GH で終末期ケアを行う事に対しての思い、家族との関係、スタッフへの関わり、他職種との関係、高齢者の死に対する思いなどを中心に半構造化面接を行った。

#### 5. データの収集方法と範囲

東海・近畿圏 4 県の認知症 GH 連絡協議会等の役員を通して、終末期ケアを実践している事業所の紹介を受けた。管理的な立ち位置にあり、GH で終末期ケア実践の経験がある職員を対象として 4 県 11 事業所（16 名）のインタビューを実施した。職種は問わなかった。

#### インタラクティブ性

データ収集において、研究者は看護教員としての立場でインタビューを実施した。聞き取り対象が看護職以外の場合、看護職に対して複雑な思いを持ちながらインタビューに応じる可能性があることは容易に想像できた為、率直に語りやすいように、実践者としての立ち位置でなく、今後看護教育に還元する為の協働促進に向けた立ち位置にあること、直接的な利害関係がないことに触れながらインタビューを進めた。

#### 6. 分析焦点者の設定

GH において認知症高齢者の終末期ケアを実践した経験のある管理的な立場にあるケアスタッフ。

※「終末期ケア実践の経験がある」とは、「終末期（医師の診断が基盤）であることを自覚し、提供しているすべての内容（家族との調整などの間接的な内容も含む）について、期間や程度に関係なく、経験があるとする。」とした。

<頂いたご助言>

- ・直接的なケア行為だけでなく、GH での運営を考えて全体を左右する存在にある人を対象としているが、管理的な立場であるが故に様々な社会的相互作用が考えられる。スタッフとの関係、利用者との関係、家族との関係どれも同じように取り上げたいと考えているのか、絞ってみていきたいのか。
- ・分析テーマが2つあり、思いと実践者が違うように取れる。
- ・実践のプロセスであればケアを実践している人を焦点として、ケアの始まりと終わりが何なのか、どのようになるとケアを実践したというのか絞っていくとよいのではないか。
- ・何がターミナルであるかということの決定の難しさ、亡くなることは自然ということの捉え方も介護職と医師とでは違う、その中で職員が安心してケアが出来るかということは課題になっている。非常にいろんな人が関わってきて難しい研究である。

#### ＜発表を終えて＞

高齢者終末期ケアに関しては、これまでも継続して関心を持ち取り組んできたテーマであり、現在は特に生活の場における終末期ケアに関心を持って研究に取り組んでいます。終末期ケアは、様々な要素が複雑に絡み合い形成されているため、一部を切り取って考えるということが難しく、インタビュー内容も多岐にわたっており、どこから分析を始めてよいのか躊躇しておりました。（すなわち、インタビュー内容の検討がもっと必要だったということもわかりました）

今回、構想発表の資料をまとめていく過程で、SV を担当して頂いた小嶋先生から投げかけて頂く問の意味を段階的に考え、記述していくことで、自分が今回の分析で何を明らかにしたいのか、どの部分を絞っていくべきなのかということを考えることが出来ました。お忙しい中、ご指導頂き感謝いたします。また、フロアーの先生方からのご意見、資料に記述して頂いた感想なども非常に勉強になりました。今後も、勉強会に参加し知見を深めたいと改めて感じました。ありがとうございました。

#### 【SVコメント】

小嶋章吾（国際医療福祉大学）

冒頭に、まず十分なSVの期間が取れなかったことをお詫び致します。認知症の高齢者の急増への対応が焦眉の課題となっている今日、本研究テーマの社会的意義はいくら強調してもしすぎることはないものと思われます。

構想発表としての発表ではありましたが、すでにインタビューによるデータ収集を終えられており、概念を1つほど生成された段階であったため、中間発表としてエントリーしていただいても良かったかもしれません。

発表に先立って確認させていただいたことは、分析テーマ、分析焦点者、現象特性でし

た。まず、分析テーマを「管理的な立場にあるケアスタッフの GH における認知症高齢者の終末期ケアに対する思いとケア実践のプロセス」とされています。すでに発表者自身、「GH の高齢者終末期ケアに影響を及ぼす要因としての管理者の影響について、明らかにしている」とのことでしたので、GH における「管理的な立場にあるケアスタッフ」が分析焦点者であることはよく理解できます。実際、分析焦点者については、「GH において認知症高齢者の終末期ケアを実践した経験のある管理的立場にあるケアスタッフ」とされていたので、発表では、「管理的な立場にある」との意味や、「終末期ケアを実践した経験」の意味について、説明していただくようお願いしました。

次に、現象特性については、単に「ケアスタッフ」が主語となっていたため、分析テーマや分析焦点者に即して、「終末期ケア実施経験のある事業所において管理的立場にあるケアスタッフ」のように、主語を明確にさせていただきました。

本来ならば、このように分析テーマと分析焦点者、現象特性を大まかに明確化したうえで、「終末期ケアに対する思いとケア実践のプロセス」を明らかにすべく、インタビューガイドを作成することになるのですが、実際には既にデータ収集のためのインタビューを終えられていたため、M-GTA における第 1 のインタラクティブ性（データ収集時）についての SV をする機会を逸してしまったことが残念でなりません。インタビューガイドのあり方によって、M-GTA に適したデータを収集の成否が決まると言っても過言ではないからです。インタビューガイドは 15 項目にわたっていますが、事業所の体制や方針など、基本的情報に関する項目も含まれており、やや総花的なインタビューガイドになっていることは否めません。また、発表者はインタビューに際して、「データ収集において、研究者は看護教員としての立場でインタビューを実施した。聞き取り対象が看護職以外の場合、看護職に対して複雑な思いを持ちながらインタビューに応じる可能性があることは容易に想像できた為、率直に語りやすいように、実践者としての立ち位置でなく、今後看護教育に還元する為の協働促進に向けた立ち位置にあること、直接的な利害関係がないことに触れながらインタビューを進めた。」とされていますが、むしろ、分析焦点者の終末期ケアに対する思いがどのような変容を遂げ、ケア実践がどのように展開していったかに焦点を当てたインタビューになっていたかが重要でしょう。

1 つだけ、「GH での終末期ケア提供につながる死生観」という概念を生成されています。研究会当日は、持ち時間の制約から検討する余裕がありませんでしたが、立ち止まった「死生観」ではなく、このような死生観がどのように生まれてきたかという、死生観の動きが表現できるような概念名は考えられないでしょうか。

今回の発表を契機に研究を進めていかれることを期待したいと思います。

### 【特別企画プログラム】

今回の定例研究会では、発表者定員に対して時間的な余裕が生まれたため、有意義な研究会とすべく、次のような特別企画を試みることとなった。

#### 1. 目的

M-GTA について日頃の疑問を出し合い、理解を深める

#### 2. 方法 16:20～17:50

##### (1) グループ討議

- ① 司会・書記・発表者を決めてもらった。
- ② 自己紹介（所属、専門、研究テーマなど）
- ③ M-GTA に関する疑問・意見を出し合った。
- ④ グループで疑問・意見を整理し、記録した。

※各グループに世話人が入るが、グループ内での質疑は行わない。

##### (2) 全体会

- ⑤グループ記録の要点を板書し、グループで出た疑問・意見を全体で共有した。
- ⑥ 世話人会として分担して説明した。

#### 3. 事前準備

- (1)参加者には、各自、事前に疑問・意見について、整理して参加していただくようお願いしておいた。
- (2)木下康仁先生の著作等、必要な資料の持参をお願いしておいた。

全体会では、グループで出された疑問・意見の全てを取り上げることはできなかったが、主として、分析テーマや分析焦点者の設定の仕方、概念生成のあり方など、基本的な内容が多くを占めていた。このことから M-GTA の提唱者である木下先生の著作を中心に、M-GTA の基本的な文献に立ち返り、事前に十分な学習をしたうえで M-GTA を活用することが重要であることを再確認するとともに、今回のような企画も学習を深める絶好の機会となるように思われた。

### ◇近況報告：私の研究

前原 和明（栃木障害者職業センター／障害者職業カウンセラー・臨床心理士）

私は、独立行政法人高齢・障害・求職者雇用支援機構の運営する栃木障害者職業センターに所属しています。障害者職業センターは、「障害者の雇用の促進等に関する法律」に規定された職業リハビリテーションを推進する機関の一つになります。平成 25 年 4 月から企

業に義務づけられた障害者の雇用割合が 2.0%に引き上げられました。また、6 月には、「障害を理由とする差別の解消の推進等に関する法律」の公布があり、平成 30 年には、精神障害者の雇用義務化と雇用率の 2.0%から段階的な引き上げが決定しています。

このような諸情勢の中、障害者職業カウンセラーとして、障害者の雇用促進に向けての支援を行っています。具体的には、職場適応を支援するジョブコーチといった障害者に対する支援、雇用を企画する企業への雇用創出に向けた支援、地域の就労支援の活性化に向けた支援機関への助言、そして、上記の支援を円滑に進めるための諸機関との連携といった業務を行っています。障害者雇用と言っても、単に適応を支援するだけでなく、幅の広い支援が求められています。

就労支援の難しさとして、障害のある方の気持ちにどのように寄り添いつつ雇用に結びつけていくか、企業の雇用の機運をどのように醸成していくか、より良い連携をどのように取っていくかといったテーマに関連する事柄があるように思われます。しかし、この難しさに答えを与えてくれるような研究は少なく、個々の支援者の熟練の勘に頼られていたり、企業のビジネス的な考え方から支援者に難しさとして認識されていないなどの状況があります。このような諸情勢と職業リハビリテーションの学問的観点から、実践に役立つ研究が、益々求められてきていくことができます。

おそらく、M-GTA は、職業リハビリテーションの前進にとって、有効な研究方法になると思われれます。しかし、私も含めて、その方法が十分に活用できているとは言い難いようです。そのために、研究会では、今まで書籍だけでは分からなかったポイントや考え方について学び、職業リハビリテーションにおける研究に結びつけていきたいと考えております。このような志を持っていますはいますが、研究に慣れている訳ではなく、わからないことだらけです。そのため、まずは、同じ関心で集まる参加者との横の繋がりを作っていくことができればと思っています。このような繋がりを通して、自分自身の研究テーマを洗練し、職業リハビリテーションの発展に役に立つ研究を行っていきたいと考えています。どうぞよろしくお願いします。

.....

丹野克子（山形県立保健医療大学 ）

M-GTA との出会いは、それと意識することなく始まりました。某大学図書館で学術誌を 1 冊ずつ手に取り、論文タイトルを 1 つずつたどっていったときに見つけた「特別養護老人ホーム新入居者の生活適応の研究―「つながり」の形成プロセス」に心惹かれた時です。当時の私が求めていた先行研究とはまったく関係のないテーマの、しかし当時の私の現場に関連するタイトルを見て、根拠なく「読まねば！」と複写して持ち帰りました。小倉啓子先生の論文です。

これ以降、新規入居者が施設に馴染んでいくには「つながり」が大事なよという助

言を、悩むケアスタッフに何度言ったことか。そして、私自身が、利用者と関係を結ぼうとする時に「つながり」を意識することによって、どれだけ助けられたことか。そして、この検証体験をどう扱ったらよいものかとも考えておりました。しかし、その頃の私はM-GTAにより構築された理論と出会ったのであり、M-GTA という方法にはまだ出会っていませんでした。

M-GTA について、本を読んでもわからないものはわからず、苦戦します。苦戦解消戦略が、この研究会に参加させていただくことだと、入会して僅か4ヶ月、2回の参加ながらも感じています。そのような私にとって、今回の研究会での質疑応答コーナーは有意義でした。印象的だったもののうちのひとつは、現象特性についての説明です。山崎先生は、「現象特性で表現されるのは、領域を超えて耐えうる理論」とおっしゃった（記憶にて言葉は曖昧）でしょうか。その瞬間、「序破急」（もとは雅楽の構成）や、「守破離」（もとは茶道の修行段階）が頭に浮かびました。これらの理論は、現場の体感がまとめられ、いわずもがな領域と時代を超えて活用されている理論です。これで現象特性についての私のイメージがパッと晴れました。帰宅して木下先生のご著書<sup>\*</sup>を読みますと「分野や個別の研究対象を横断する、純粋にうごきとしての特性のこと」「領域密着型理論からフォーマル理論につながるヒントに（なる）」「現象特性を考えることで解釈的思考を習慣化でき、まとめにつながる着想を得やすくなる」とあります。そこで、私が現在分析中の“専門職の間に起こる相互作用のプロセス”について、現象特性という観点から見直したところ、今までとはちょっと違う概念名や概念同士の関係が見えてきました。ちょっとだけですが…。

——以上、出会いと学びのご報告です。今後とも、どうぞよろしく願いいたします。

※木下康仁. ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて. 東京：弘文堂；2007. p. 217-222

.....

田辺有理子（横浜市立大学医学部看護学科）

研究会の皆さま、はじめまして。私は看護師として精神科領域での臨床経験を経て、現在は精神看護学の教員として、看護教育と研究に取り組んでいます。

私の研究テーマは、「精神科看護の歴史」と「医療現場で暴言や暴力を受けた看護師への支援」で、そのほか複数の研究が並行して進んでいます。関心が広がり過ぎて、聞き取りを行ったにもかかわらず分析が滞っているデータもあり、あらためて一つ一つのデータに向き合いたいと思っています。そのうちの1つをM-GTAでまとめたいと思い立って、今回1月11日に研究会へ今年度初めて参加しました。M-GTA研究会への参加は3年間で3回目、なかなか日程が合わないことを言い訳にして、今回久しぶりの参加でした。

この研究会では、様々な分野の取り組みを知ることができ、それがとても良い刺激になっています。分野は違っても、分析焦点者の設定や分析テーマの絞り込みなど、自分の研

究でも曖昧になっている部分を考えるヒントがたくさんありました。また、発表される皆さんがその研究テーマに深く入り込んで、データと向き合っている姿を拝見して、私も立ち止まってはいただけないとやる気が出てきました。

そして、懇親会では自分の研究についても話を聞いていただき、また質問されることで自分の思考も整理でき、本当に貴重な時間になりました。自分で考え直してみたら、分析よりもテーマ設定に立ち返り、もう一度文献検討に戻ろうという考えに至りました。次に研究会に参加するときには、少しでも進んだ段階での疑問を解決できるよう早速取りかかりたいと思います。

今後ともご指導いただきますようよろしくお願いします。

.....

### ◇第67回定例研究会のご案内

日時：2014年3月1日（土）

会場：立教大学（池袋キャンパス）マキムホール3階、M301 教室

### ◇編集後記

早いもので2014年1月も20日が過ぎてしまいました。今日は大寒。各地からの雪の報道は、関東地区の寒さをも一段と強く感じさせます。北日本地方の方々にとっては、雪とともに生活していかなければならないこの大雪は大変な状況でしょう。

自分の身長2倍もある積雪との戦いなのです。屋根の雪おろしや車道・歩道の確保は、それ自体が一仕事となって体力、行動、生活を脅かしているのです。しかし反面、太陽が顔をだし青空が広がると、今まで刺すような冷たさの外気温が、柔らかくなり、雪が解け、温かく周りを包み込んでくれるんですよ。そんな時、太陽エネルギーって偉大だなんて実感します。そして、あと2週間で立春。穏やかな春が徐々に近づいてきています。

さて、今回の研究会での新しい取り組み、ご参加の皆様はいかがでしたでしょうか？研究を進めていらっしゃる方々にM-GTAをさらにご理解いただくよう、有意義な会の運営を心がけています。研究に対し悩みや相談があれば、この研究会を通して、自ら積極的にご参加されることを願っております。（塚原節子）